4月7日の説教要旨　　「わたしの主、わたしの神よ」　　山本一牧師

ヨハネによる福音書20章19～29節

●詩編23編で旧約聖書の詩人は神さまのことを「主は**わたしの**羊飼い」と述べて、他でもないこの「わたし」を愛し、守ってくださる方、それが神さまだと告白しています。復活のイエス様に最初にであったマグダラのマリアも、イエス様に「マリア」と名前を呼ばれ、「**わたしの**先生」と呼びかけています。この「わたしの」という言葉がとても大切なのです。

カトリックのシスター渡辺和子氏の講演会に参加した時、次のように話されました。「いくら親や教師から『命が大切だ』と言われても、子ども達はもううんざり、そんな言葉よりも一人の名前を呼んで『あなたが大切なんだ！』というその言葉が聞きたいのです。」

人間関係が希薄になりつつある現代、そのような愛情のこもった言葉を受ける事はなかなかできません。だからこそ私たちは日曜日ごとに教会に集い、神様がこの「わたし」を深く知り、愛しておられるという事を思い起こすのです。

●「週の初めの日」、つまり日曜日に復活のイエス様が、弟子達の集っている場所に突如現れ、「平和があるように」と語りかけられました。それはイエス様を裏切った弟子たちへの愛と赦しの宣言でもあったのです。その事に弟子たちは喜びましたが、12弟子の一人「トマス」はそこにいませんでした。トマスの「イエス様の傷の跡を見そこに触れなければ信じない」という言葉には「疑い」と共に「信じたい」という二つの心が見られます。トマスは他人がいくら「イエスさまと出会った」と言っても、何よりもこの「わたし」と会ってくださり、「わたし」を赦し、愛していることを示してくださるのでなければ意味がない。そのような思いだったのではないでしょうか？

　しかし、そんなトマスも1週間遅れの日曜日にイエス様と出会い、その傷を示されて、「わたしの神、わたしの主」と述べて、他でもないこの自分のために、イエス様が十字架にかかってくださり、愛し赦して下さった、という事を信じることができたのだと聖書は伝えています。ヨハネがあえて、1週間後にトマスが主と出会ったという出来事を最後に記したのは、毎週の日曜日において、私たちは主の愛を知るのだというメッセージ伝えているのでしょう。

●カール・バルトは、人生の一番の発見は「主われを愛す」ということだと言いました。私たちの信仰の歩みは、イエス様を「わたしの主」と告白することに導かれる旅路です。日曜日の礼拝はその歩みに欠かせないものです。私たちも「トマス」のような存在ですが、必ずや私たちに語りかけてくださるイエス様を信じて礼拝に集い、主こそが「わたしの主、わたしの神」という思いを日曜日ごとに与えられつつ、信仰の旅路を歩んでいきたい。そう願います。